教職員のための防災基礎講座⑤

体験しながら防災を学ぶ

今回は、防災教育推進協会が実施している体験型防災学習プログラム「防災の島」を紹介します。

体験型防災学習のススメ

防災教育推進協会では、子どもたちの防災力の向上を図るため、防災検定のほか防災寺子屋（出前授業）も実施しています。

授業内容については、子どもの年齢等に合わせるとともに、地域によって災害リスクが異なるため、できる限り地域の事情を踏まえたものになるよう心がけています。学校側からは、座学だけではない授業をしてほしいというご要望を多くいただきますが、その際には、体験型防災学習の実施をオススメしています。

体験型防災学習は、子どもから大人まで楽しみながら防災に取り組めます。頭で考え、体を使って覚える体験型学習は、防災を学ぶには適した方法であると考えています。今回は、当協会が実施している体験型の学習のうちのひとつ「防災の島」を紹介したいと思います。

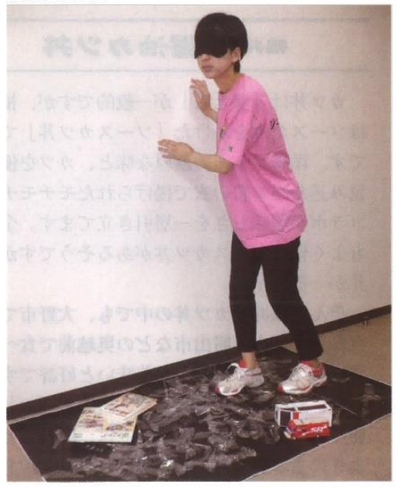
「防災の島」は、複数の島で構成され、それぞれの島に防災に関する体験や訓練が用意されています。今回紹介する3つの島以外にも「デンゴン島」「コウズイ島」など、防災に関するさまざまな体験ができる島があります。

暗闇の中の避難体験

Ⅰ「クラヤミ島」

①**設定**…地震が発生し、停電になり真っ暗な中で、窓ガラスの破片・本・おもちゃなどが床に散乱している部屋から脱出することを疑似的に体験させます。

②**手順**…床の上に、ペットボトルを切った破片をまき、段ボールや本などを乱雑に置きます。子どもにはアイマスクをつけてそこを歩かせます。



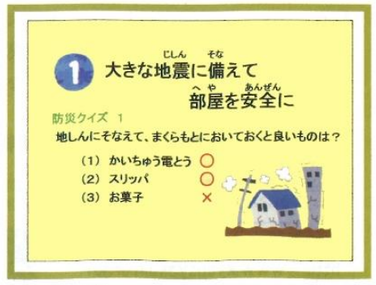
脱出訓練の様子

●指導ポイント

体験の後は、防災クイズを行います。たとえば、「どんな時間帯に地震が起きると危険か？」「地震に備えて枕元に置いておくとよいものは？」などの質問をします。

地震から身を守るためには、事前の備えがとても大切です。特に寝ているときは無防備なため、すぐに身を守る行動をとることができないので大変危険です。地震への備えとして、自分や家族が寝ている部屋を安全にしておく必要があります。部屋にどのような危険があるのか認識させ、家具の転倒・落下・移動を防止する対策を教えます。

また、足などをケガせずスムーズに避難できるように、枕元には懐中電灯やスリッパを用意しておくこと、避難のための出入口をきちんと確保しておくことの大切さも理解するよう指導します。



防災クイズの例

その他の防災体験

Ⅱ「ドリンク島」

①**設定**…家庭で災害に備える防災用品の準備をしているとき、持ち出す水の量はどのくらいが適切か、備蓄する水の量はどのくらい必要かなど災害時の飲料水について考える訓練です。

②**手順**…3リットル（一人あたり1日に必要な水の量）の水を用意し非常持ち出し袋に入れて子どもに背負わせます。

水を入れた非常持ち出し袋を背負った様子

Ⅲ「キュウキュウ島」

①**課題**…医療品がない状況で、身近な物を使って、骨折や出血している人の応急手当を行う体験です。

②**手順**…ハンカチ・レジ袋・雑誌・新聞紙・ストッキングを用意します。これらの物を使って骨折している人の腕を固定したり、頭から出血している人の応急手当を行うよう促します。

レジ袋などを使った応急手当

実施にあたっての流れ

「防災の島」を実施する場所としては、通常、体育館を使って行います。体育館全面に複数の島を配置して子どもたちが体験できるスペースを設けます。広い場所が確保できず教室などで行う場合は、島の体験をひとつずつ行います。

所要時間は、人数にもよりますが、授業時間2コマ以上が必要となります。時間がない場合は、体験のいくつかを選択して実施することもあります。

学習の進め方は、まず、全ての島での体験を行った後に、防災クイズでおさらいをしながら、重要なポイントを解説するという流れで進めます。

子どもたちは、体験を通して防災意識が高まっていますので、クイズ問題やポイント解説を行うことによって、防災知識をより定着させることができます。災害時に自分の身をどう守り、どう行動するのか。しっかり考え行動する力が養われます。

体験型学習は、みんなで取り組めるというのもよい点で、ある学校では、学校公開の日に授業参観に来られた保護者からボランティアを募り、運営者側に回って"参加"いただいたケースもあります。

大がかりな準備は必要ありません。学校でも比較的簡単に実施できるので、取り組んでみてはいかがでしょうか。

笠間正弘
一般財団法人
防災教育推進協会常務理事

1961年宮城県生まれ。子どもたちが自ら考え行動する真の"防災力"を育むため、「ジュニア防災検定」や「防災寺子屋」などの防災教育事業を行っている。著書『わたしたちの防災』